

阿闍世説話に見える説一切有部の人間観 福田 琢（同朋大学）

アビダルマ仏教の立場から「人間」定義を示すことが課題となれば、まず本質論的考察（原始仏教の五蘊説以来の伝統としてのダルマのカテゴリー体系に基づく、普遍的な人間存在の分析と定義）が取りあげられるべきと思う。が、ここでは発表者の近年の関心に即して、アビダルマの業論に見られる、より実存的な人間論（阿含資料や律文献に挙げられた事例に基づく、人間の行動規範や善悪をめぐる倫理的考察）を扱うことを許されたい。具体的には『沙門果経』に説かれる阿闍世の救済をめぐって、説一切有部がこれをどのように解釈しているかを尋ねてみる。

仏典に登場するさまざまな弟子のなかでも、その「悪人」性においてアングリマーラ（指鬘）とアジャータシャトル（阿闍世）は際だっている。盗賊アングリマーラは多くの人を殺し、殺した人の指で首飾りを編んだといい、アジャータシャトルは王家に生まれ、王権を得るために実父を殺害したという。仏滅後の出家僧団であれば、かれらはおそらく仏弟子を名乗ることさえ許されなかったろうが（律蔵の条項によれば盗賊や尊属殺人を犯した者の出家は認められない）、釈尊（ゴータマ・ブッダ）は二人を弟子として受け容れ、回心させた。アングリマーラはわずかな問答の後に武器を投げ捨てて沙門となり、やがて阿羅漢果を得た。六師外道の哲学に満たされなかった『沙門果経』のアジャータシャトルは、釈尊の教えに癒され、在家弟子として仏に帰依した。二人の物語は阿含・ニカーヤおよび律蔵に見られ、不明な点が多いにせよ、おそらく何らかの史実を核としている。それが、釈尊のカリスマ性、慈悲深さ、人々を導く方便の巧みさを強く印象づける逸話として広く流布されながら、多種多様なヴァリエントを生んでいったのであろう。

ところで、奪った命の数は多いが、劇的に回心し、釈尊のもとで出家した後は比丘として生涯、清浄行を実践したアングリマーラに対して、アジャータシャトルは釈尊の教えに感銘を受け、自らの父殺しの罪を告白までしているものの、結局は出家せず、優婆塞となるにとどまっている。そして釈尊の晩年を語る『遊行経』（非大乘系涅槃経）冒頭では、ヴリジ族（ヴァッジ族）への侵略戦争の是非を釈尊に問うてもいる。つまり初期資料におけるアジャータシャトルは、一方で父殺しを悔い、告白し、仏に帰依してはいるが、他方ですべてをなげうって出家するほど回心してもいなければ、父殺しによって奪ったマガダ国王の座を手放そうともせず、釈尊の晩年に至っても、さらなる領土の拡大を企てる程度に世俗的野心を持ち合わせた人物として描かれているのである。

このようなアジャータシャトルが『沙門果経』において仏に帰依し在家信者になったという、その帰依あるいは信心の内実はどう理解されるべきか。（根本）説一切有部系の諸資料は、このことを解釈するために「無根の信」（*amūlikā śraddhā）という特殊な術語を導入している。本発表では『大毘婆沙論』を中心に、説一切有部アビダルマ文献において「無根の信」という語が本来どのような文脈で用いられていたかを確認し、その解釈の変遷を辿りながら、阿闍世説話を通して見える説一切有部の人間観の一端を明らかにしたい。

<キーワード> 『沙門果経』、阿闍世、無根信